

ハーモニー

まちに広がる出会いと学び、体験・交流の場



コラム はぎとり標本とボーリングコア ー地層や断層を採取し、未来に残すー

植物と土壌に覆われた大地が広がる日本列島では、地下の地層や断層のずれを観察できる機会は多くありません。地層や断層が地表に現れた場所を露頭と言い、露頭は道路や建物の工事で地面を掘ったり、削ったりした時にも出現します。露頭に現れた地層や断層を、布を貼り付けて薄くはぎとった標本が「はぎとり標本」です(図1)。はぎとり標本では、露頭を裏側から見た状態で地層や断層を観察できます。露頭は時間の経過とともに無くなりますが、はぎとり標本は半永久的に残すことができます。



図1 約9千年前の福知泥炭層のはぎとり標本(宍粟市歴史資料館で展示中)

平野の地下深くに眠る地層は、簡単に調べることができません。調査・研究の目的で、地下の地層を上下の重なりを乱すことなく、円柱状に掘り上げた試料が「ボーリングコア」です。1995年阪神淡路大震災の直後には、地震被害の原因を探るために阪神間の平野で深さ100m以上のボーリングコアが多く採取されました。神戸市東灘区で深さ1700mまで掘られた「東灘1700mボーリングコア」では、約350万年間に堆積した長さ1545.7mの地層が採取されました(図2)。このボー



図2 東灘1700mボーリングコアのピンク火山灰層準

リングコアを用いた研究では、地球規模の気候変動や大規模な火山噴火の歴史など、いろいろな地学現象が明らかにされています。

加藤 茂弘(地球科学研究グループ)

トピックス

昔の風景を未来に伝える絵葉書資料

わが国では、1900年に私製葉書の使用が認められて以降、様々な絵柄の絵葉書が生み出されてきました。その1つに、名所の風景写真が印刷された絵葉書があります。写真機が普及していない時代、旅先の風景の感動をお土産に持ち帰る、あるいは訪れたことのない人々に伝える媒体として、絵葉書は打って付けだったのです。

ひとはくでは、このような戦前の古い絵葉書を収集・保管しています。昔の兵庫県の風景や自然環境を知るための、貴重な資料となっています(図3)。また、絵葉書には、その場所のベストなアングルやタイミングの風景が映し出されているため、当時の人々がどんな風景に魅力を感じていたのかを探ることができます(図4)。

一億総カメラマン時代と呼ばれる現在は、“映える”風景を簡単に撮影・共有できますが、日々大量消費され、すぐに埋もれてしまいがちです。絵葉書は、博物館が存続する限り、色あせることのない風景の感動を、未来に伝えてくれるタイムカプセルなのです。

大平 和弘(環境計画研究グループ)



図3 コウノトリの営巣地の風景

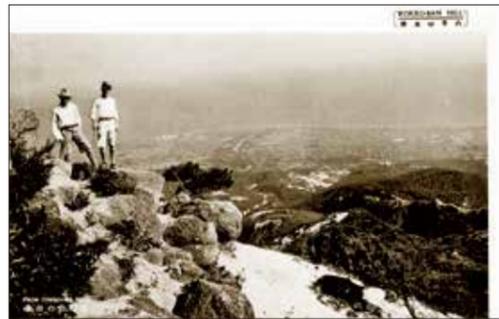


図4 絶景のリゾート地であった六甲山上



まちに広がる出会いと学び、体験・交流の場

まちなかの身近な自然

ひとはく最寄りの神戸電鉄フラワータウン駅から博物館に向かって少し歩くと、エントランスホール、恐竜ラボ、コレクションナリウムなどの建物が見えてきます。周辺にはビルや駐車場、大きな歩道橋などが目立ち、一見すると人工的なものばかりのようです。しかし、あらためて見てみると、植え込みや街路樹、路傍の草むらなど、意外と緑が豊かなことに気がつくでしょう。歩道橋を上りしばらく進むと、眼下には広々とした深田公園、そしてそれを取り巻くようにして残された里山林を一望することができます。

慌ただしい日常の中で見過ごされがちですが、フラワータウンのようなニュータウンの小さな自然の中にも多くのいのちが息づき、さまざまな生きものが暮らしています。普段と少し目線を変えてみることで、生きもののおかげで、思わぬ驚きや発見に出会うかも

しれません。生活様式や物流の変化により自然の恵みが感じられにくくなっている現代、そうした身近な自然の実態を感じたり知ったりすることは、これからの自然との向き合い方や人間社会の未来を考えていくにあたり、大切なことのように思われます。

そこでひとはくでは、こうした身近な自然を舞台とした、さまざまな学習支援の取り組みを進めています。植物や昆虫の観察、自然あそびなどをテーマにしたオープンセミナーをはじめ、エントランスホール近くの芝生エリアを活用した「そとはく」、公園緑地とそこに隣接する1階ピロティを活用した「えんがわミュージアム」などがその一例です。これらの取り組みはいずれも、実際に見て、触れて、感じる体験を大切にしています。そうした体験を一人ひとりが持ち帰り、それぞれの気づきや学びが、家庭や学校、さらには地域の中で広がっていくことを期待しています。



深田公園とニュータウンの中に残された里山林



1本のエノキにも昆虫や鳥など多くの生き物が集まる

まちの広場と博物館の役割

身近な自然を楽しむ機会づくりに取り組む中、フラワータウン駅と深田公園の間に、人々が集い、自由に遊んだり、市民が主体的な取り組みを実施したりすることのできる「エキマエアキチ」が整備されました(表紙写真)。2024年11月にオープンしたこのエキマエアキチは、遊びや地域イベントの開催場所となるハッピーパーク、バスケットボールなどを楽しめるスポーツパーク、習い事やサークル活動に利用できるレンタルルームに図書スペースが加わったエキマエベースから構成されています。オープン以降、エキマエアキチは子どもたちや学生、市民団体など、多様な世代の人たちに日々利用されています。キッチンカーやマルシェが集まる日には、家族連れなど多くの人でにぎわう姿もみられるようになってきました。

この新しい交流空間は、駅や商業施設と、緑豊かな公園の落ち着いた雰囲気と交差する場所に位置しており、隣接する博物館と連携す



そとはくの様子

ることで、まちを訪れた人や地元の方を地域の自然へゆるやかに誘う場としても機能することが期待できます。また、エキマエアキチは、まちびらきから約40年が経過したフラワータウンのこれからを考える「社会実験の場」としての役割も担っています。当館も、昨今の地域社会の課題でもある、放課後の子どもの居場所づくりに向けた試行的な取り組みとして、市民グループの方々と連携し、周辺の身近な自然や屋外空間を活用した学習プログラムを実施しています。

これに加え、まち全体での魅力づくりへの貢献として、フラワータウン再生をテーマとした地域に開かれた勉強会「PUB・ツチ」を定期的で開催し、さまざまな立場の人と対話を重ねてきました。今後もこうした実践を積み重ねながら、地域と共に歩む博物館のより良い姿を探っていきたいと考えています。

黒田有寿茂・福本 優

(新ビジョン実現タスクフォース)



まちの現在と将来について思いを馳せる勉強会「PUB・ツチ」